

よい語り わるい語り 3 おはなし会のプログラムは毎回、変化する。

(2018.6.6)

ぼくに限らず、外部からストーリーテラーや作家を呼んで「子どもの前で語ってくれ」と依頼してくるような小学校は、たいてい、ふだんから読書活動に力を入れていることが多い。

親が学校に定期的に絵本を読みに行くのはもちろん、学校司書が図書館を日常的に盛り上げていて、そういう中でのイベントの一つとしてぼくのものごとりがたりライブが年に一度あったりする。

そういう学校はやはり話しやすい。

子どもたちの中に「ものがたりを聞くのは楽しい、おもしろい」というものがたりへの信頼ができていますので、最初から聞く体勢に入ってくれる。

下地がある。

だからスーッと入れる。

すぐに入れるから、終了のチャイムが鳴る時間から逆算して、比較的、長い話もできる。ものがたりを聞くことを航海に例えるなら、船長＝語り手として、乗組員である聞き手にキャリアがそろっているのです、いっしょに遠くの海まで行けるということだ。

だが、たまにそうでないことがある。

たとえば、どこかの小学校がぼくを呼んでくれた時、ぼくは「うまく段取りをくんで、車をだしてくれるなら、同じ日に市内の別の小学校をまわってもいいですよ」と、よく言う。

実際、一日の間に三校まわって、それぞれ低学年・高学年と二回づつ、つまり一時間目から六時間目までずっとものがたりライブをやらせてもらったなんてこともある。

一日に六回も語ると、同じ話をすると自分がつまらないし、一日、運転手としてつきそってくれる先生にもなんだか申し訳ないので、手を変え品を変え、ふだんあまりやらない話もひっぱり出すことなる。

だから学校側からは「大変ですね」と恐縮されるが、本人は久々に好きな話を語れてけっこう楽しかったりする。

で、話を戻して、ぼくがそういう提案をすると、学校側はぼくのものごとりがたりライブを広めたいという思いに応えようという気持ちに加えて、他の学校と組めばぼくの交通費の負担が割り勘で安くなるという計算も成り立つ。

で、ほんとにとりよりの学校に声をかけてくれたりする。

だが、とりよりの学校も読書活動に熱心とは決まっていない。

ただ、「読書教育にいい」と勧められれば、断る理由もないから、先生方もぼくのことなど知らないし、どう迎え入れていいかわからないままオーケーして、当日を迎えるなんてことがよくある。

司会の先生が生徒の前に立って、ぼくを「さあ、どんな絵本を読んで

くださるのか楽しみですね」などと紹介してくれたりする。

ぼくは絵本は読まないのだけれど。

で、今日はなかなか大変だぞという気分は、会場の体育館にすわって子どもたちの顔を見ればだいたいわかる。しらけている。

あ、この子たちはとくにぼくになにかを期待しているわけではないな、ただ、ふだんの授業よりなにかおもしろいことがあるといいな、くらいに思っているんだろうな。

で、そうになると、ぼくには別のスイッチが入る。

よし、なにがなんでも、おもしろい時間にしてびっくりさせてやる！という、妙な熱が出てくるのだ。

ものがたりの国から頼まれたわけでもないのに、勝手に伝道師の気分になって気合が入る。

とはいえ、ふだん、ものがたりを聞いていそうもない子どもたちの前でいきなり話を始める勇気はない。

まして、絵本ならまだしも、素話を聞いたことながない子であれば、ぼくが語りはじめてもどこに目を持って行ったらいいのかわからない。

そこで前に書いた通り、親近感を持ってもらい、空気をなごやかにするためにクイズやら手遊びやら、いろいろくりだすことになる。

「ぼくはみんなの敵じゃないよ」と思ってもらい、この人の話なら聞いてみるかという気になってもらうために。

そうして、あたたまってきたら知らないうちにサッと話に入るのが理想的だ。

で、なんとそのあたためる遊びだけで 30 分たってしまったことがある。全体が 45 分なのにだ。

でも、しかたなかった。

相撲の立ち合いではないが、呼吸があわなければ立ち上がれないし、いい相撲がとれない。

で、ことば遊びでもりあがっているから、このまま最後まで行ってもいいような気もしたが、それでは「どこがものがたりライブだ？」となって、次につながらない。

それにこの時間を世話してくれた先生の立場もない。

で、授業終わりのチャイムが鳴るまであと 10 分というところから、短めの笑い話をひとつやって、かっこうをつけて時間通りに終わらせた。

で、こういうこともあるのだと思う。

子どもたちが聞いていないとわかっているのに、

当初の予定だからと、話を強行してもいいことはなにもない。

落語の世界の教えにこんなのがある。

「噺家にへたもうまいもなかりけり 行く先々の水にあわねば」
ステージはなまものだ。

だから、楽しい時間にするための変更は臨機応変にするし、

また、それができなければいけないと思っている。